

## 社会科

# 問い直しのある高学年社会科の学習

朝 倉 淳

### 1. はじめに

小学校高学年の社会科の内容には、空間的・時間的に児童の生活から遠く感じられるものが多い。また、実際に直接確かめにくいものも多い。その関係で、児童は調べる学習のときに一定の内容をまとめた教科書や資料にたよることが多くなりがちである。そして、その中に一定の解答を見つけだし、それを発表して「分かったつもり」「知ってるつもり」になり、学習を終えてしまうこともある。

しかし、仮にこのような学習の終始していたのでは、児童に社会科でねらう自ら判断し未来を選択し創造していく力を育てることはできない。児童がこのような学習で得られた解答に満足するのではなく、それをもう一度問い直し具体的にしたり吟味したりするような態度と力を育てていく必要がある。

このような問題意識をもとに、本年度、社会科の教科書を「問い直しのある社会科の学習」とした。本研究の目的は、児童に、予想や調べたこと考えたことなど自分の判断を問い直す態度と力を育てることである。ここでは、問い直しを促すいくつかの方策を示すとともに、具体的にどのように授業をつかっていくかについて展開例を提案する。

### 2. 問い直しのある社会科の学習

ここで言う「問い直しのある社会科の学習」とは、初めの問いに対して調べたり考えたりした後の一定の判断について、再度問う社会科の学習で

ある。「再度問う」とは、例えば「具体的にはどうなのか」「本当にそうなのか」「どうすれば問題が解決できるのか」と吟味していくことである。また、学習方法や学習態度について、例えば「十分にひろげて考えていたか」「具体的にイメージし吟味していたか」とふりかえることも含めて考えている。

「問い直し」は、筆者の考えている創造的な学びのプロセス（図1）の中の特に「吟味する」「具体化する」にかかわる部分である。ここで問い直しをしながら、発想や思考が具体化されていくのである。また、問い直すことは、創造的に学習プロセスにてらして学習方法・学習態度について自己評価をしていくことでもある。このように問い直しの生まれるような学習は、研究主題「創造性を育む」、副題「一人ひとりの発想・思考に生きる評価」につながると考える。

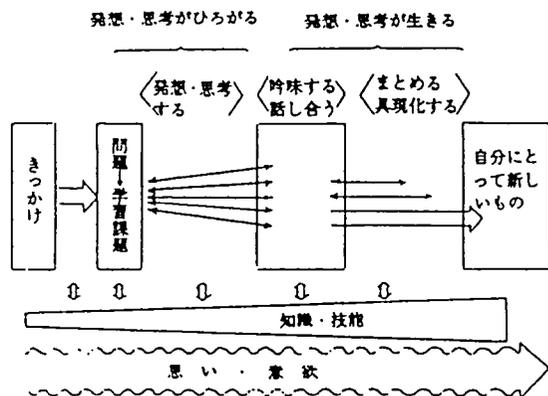


図1 創造的な学びのプロセス（社会科）

### 3 問い直しを促す方策

児童が、問い直していく経験を積み重ねることによって、問い直す態度や力を育てることができると考える。そのためには、児童が問い直しをするような学習を展開することが必要である。児童に問い直しを促す方策として次の三つを考えた。このうち(1)は直接的な授業者の支援・働きかけによって問い直しを促すのであり、(2)・(3)は活動を通して問い直しを促すものである。

#### (1) 発問によって問い直しを促す

児童が、初めの問いに対して調べたり考えたりしたことを話し合う。その話し合いの中で、あるいは話し合ってから一定のまとめをした後に、発問をすることによって、問い直しを促すことができると考える。ここでの発問は、例えば次のようなものである。

＜具体的にイメージしたり吟味したりすることを求める＞

- ・具体的にはどういうことですか。
- ・○○とはどういう意味ですか。
- ・例えばどんなものですか。
- ・言い換えるとどうなりますか。
- ・○○はそれにあてはまりますか。
- ・本当にそうですか。

＜経験を問う＞

- ・本物を見たことがありますか。どうでしたか。
- ・テレビや本で見たことがありますか。どうなっていましたか。
- ・聞いたことがありますか。どんなことを聞きましたか。
- ・やったことがありますか。どうでしたか。

このような発問によって、児童に直接問い直しを促すことができると考える。また、児童の発言のうち、不明なところを質問したものや例を挙げて説明したものなどを取り上げ、評価することで、吟味したり具体的にしたりすることを意識づけることができる。このようにして、具体的にイメージしようとする態度を養うことで、次第に授業者が発問しなくても、児童がお互いにそのような発

言をするようになると思える。

#### (2) 話し合いを通して、問い直しを促す

話し合いの中で、いろいろな感じ方や考え方にふれることにより、自分の感じ方、考え方を問い直すきっかけが生まれると考える。そのような話し合いになるには、多様な感じ方、考え方が自由に申し合わねなければならない。そのためには、次のようなことが大切であると思える。

ア 事象との出会いを工夫し、課題意識を持たせる。

イ 話し合いの前に、各自が感じたり考えたり調べたりする場をつくり自分なりのものを持たせる。

ウ 自分なりのものを自由に出しやすい雰囲気をつくる。

また、集団を二分し立場を明確にして話し合う形をとったり、グループを活用してグループごとの考えを話し合う形をとったりすることなどで、より効果的な話し合いができると考える。

#### (3) あらわす活動を通して、問い直しを促す

初めの問いに対して予想したり調べたり考えた後に、何らかのあらわす活動をしくむことで問い直しを促すことができると考える。

ここで言うあらわす活動とは、例えば次のようなものである。

- ・動作化する。
- ・声に出して言う。
- ・ふきだしにする。
- ・即興的な役割演技をする。
- ・劇化する。
- ・ものをつくる。
- ・想像図を書く。
- ・会話文をつくる。
- ・計画をたて実施する。

このような活動を通して、児童は予想したことや調べたり考えたりしたことが漠然としていたことに気づく。あるいは、自分の範疇になかったものに気づく。このような気づきが問い直しにつながると考える。

#### 4. 問い直しのある授業づくり

—— 第6学年「大仏と奈良の都」 ——

##### (1) 単元について

6世紀末から8世紀にかけて、聖徳太子の冠位十二階・十七条の憲法・遣隋使などの諸政策、大化の改新による地方行政・税・班田収授などの制度の整備、平城京の造営などが行われ、国としての基盤、天皇中心の政治制度がつくられていった。その過程で人々の貧富の差が拡大し、貴族の暮らしが華やかになる一方で農民の暮らしは大和時代とあまり変わらないという状況が生まれた。この時代の学習では、国としてのいろいろな制度がつくられていくようすや支配者・被支配者の関係を具体的にみることができるとともに、法隆寺や奈良の大仏などの文化遺産や今日に残る生活様式を通して、その背景を考えていくことができる。

##### (2) 単元の目標

- 現在に残る文化財や生活様式と結びつけながら、飛鳥時代、奈良時代の政治や文化、民衆の暮らしなどについて、関心を高めるようにする。
- 政治のしくみや農民の暮らし、奈良の大仏などについて自由にイメージしたり資料を使って調べたり表現したりするようにする。
- 飛鳥時代、奈良時代を通して次第に天皇を中心とした国家の体制ができあがっていったことを理解するようにする。
- 新たな問いをもとに学習内容を吟味し、学習方法・態度についてふりかえるようにする。

##### (3) 単元計画

第1次	大陸文化と新しい政治	2時間
第2次	奈良の都	6時間
	平城京と農民の暮らし	(2時間)
	奈良の大仏	(3時間)
	正倉院と遣唐使	(1時間)

##### (4) 問い直しを促す方策の具体化

ここでは、第2次の中での「奈良の大仏」(3時間)について、前述の方策(3)「あらかず活動によって問い直しを促す」を中心にした展開例を提案する。

##### <第1時>

目標 奈良の大仏の実物大(平面)の顔をつくり、大仏の大きさを感じるとともに、大仏の形態や大仏づくりの目的、方法などについて疑問を持つ。

主な学習活動	方策との関連
1 奈良の大仏の写真を見て、感想や経験を出し合う。	
2 学習課題を設定する。 ○ 奈良の大仏の顔をつくろう。	
3 模造紙と新聞で実物大(平面)の大仏の顔をつくる。	(2)ーア
4 感想や疑問を書く。	(資料1)

##### <課外>

主な学習活動	方策との関連
1 各自、自分や他の人の疑問について調べる。	(2)ーイ

##### <第2時>

目標 大仏に対する各自の疑問について調べてきたことを発表し大きさやつくられた方法、経緯などについて話し合う。

主な学習活動	方策との関連
1 学習課題を設定する。 ○ 奈良の大仏について調べてきたことを発表しよう。	
2 調べてきたことを発表し、話し合う。	(2)ーウ (資料2)
3 農民はどんな仕事をしていたのか疑問を持ち、次時の学習課題とする。	(1)

<第3時>

目標 大仏をつくるために農民がしたことや農民の思いを出し合い、大仏の建立は農民にとってはかなりの負担であるなど大仏の建立にはいろいろな見方があることに気づく。

主な学習活動	方策との関連
1 学習課題を確認する。 ○ 大仏をつくるために農民はどんな仕事をしたのだろうか。	
2 大仏をつくるために農民がした仕事を具体的に出し合う。	(資料3)
3 仕事をしているようすを※動作化し、思いを書く。	(3) (2)-イ
4 仕事をしている農民の思いについて、話し合う。	(2)-ウ (資料4)
5 学習をまとめる。	

※ 学習活動の2で出し合われた農民の仕事の中から地面を掘ることについて動作化する。自分の席の場所で、立って鍬を構えてふりおろす動作を繰り返す。動作に入る前に当時の農民のくらし(既習)について、言葉掛けによってイメージさせておく。動作がより具体的になるように、動作の途中でも当時の鍬と同じつくりの鍬を見せたり声をかけたりする。

(5) 授業の実際

<第1時>

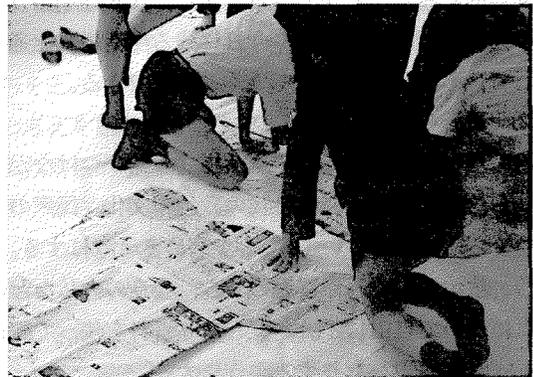
写真1, 2は、実物大の大仏の顔(平面)を模造紙と新聞紙でつくっているようすである。

次にあげる18の疑問は、この活動の後に出された疑問を、同じ内容のものを省いてまとめたものである。

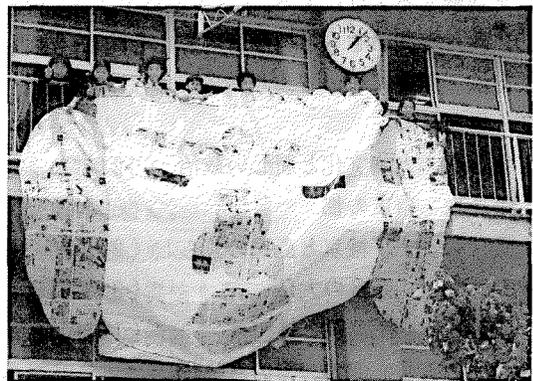
資料1

- Q 1 大仏の本当の大きさはどのくらいか。
- Q 2 大仏をつくるのに何がいるか。
- Q 3 らほつの玉は全部で何個あるのか。
- Q 4 なぜ鼻と眉がつながっているのか。
- Q 5 なぜ頭のらほつが丸いのか。

- Q 6 なぜいぼがあるのか。
- Q 7 なぜ右手を挙げているのか。
- Q 8 なぜ奈良の東大寺にあるのか。
- Q 9 だれが大仏をつくったのか。
- Q 10 だれが大仏をつくると言ったのか。
- Q 11 だれが大仏の設計図をつくったのか。
- Q 12 何のために大仏をつくったのか。
- Q 13 なぜ大仏はあんなに大きくしたのか。
- Q 14 大仏は何の役にたつのか。
- Q 15 大仏をたてて効果があったのか。
- Q 16 つくるのに何年くらいかかったのか。
- Q 17 何人くらいの人がつくったのか。
- Q 18 どうやってつくったのか。



「大仏の顔をつくろう」



「大きさを確かめよう」

<第2時>

初めの疑問について、各自が調べたことを出し合い話し合った。話し合いで確かめられた主な内容は次の通りである。

資料2

Q1・3・5・13について

高さ16m らほつ966個 など

Q2について

銅500 t	錫8.5 t	金150 m
水銀	米	木材
革	紙	藁
布	石	粘土 など

Q9・10・11について

人 聖武天皇……詔を出す  
 役人……監督をする  
 渡来人・工人……設計する  
 指示する  
 行基……協力する  
 農民の労力を集める

民（農民）

Q12・14・15について

重い税に苦しむ農民が土地をすてて逃げる

ききんや伝染病がおこる  
貴族の争いや乱がおこる。



世の中の乱れをなくそう  
（詔）が出される。

Q16について

743～752年（大仏本体3年）

Q17について

毎日2000人 のべ約260万人

Q18について

- ① 木・竹で骨組みを作り粘土で原型の像をつくる。
- ② 原型の上に粘土をぬって外型をつくる。
- ③ 外型をはずして原型の表面をけずる。
- ④ 外型を組み直し、すきまに銅を流

し込む。（だんだん山になる。）

- ⑤ 山を崩し、表面を削る。
- ⑥ 金を塗る。

<第3時>

大仏をつくるために農民はどんな仕事をしたかについて出し合われた内容は次の通りである。

資料3

木を切る	木を削る
山を崩す	らほつを運ぶ
銅を溶かす	石を運ぶ
土地をきれいにする	木を運ぶ
砂金をみつけてくる	土を運ぶ
米などを運ぶ	銅を流す
木で骨組みをつくる	粘土を塗る
土をうめる	地面を掘る
地面をもとに戻す	道具を運ぶ
石をみがく	足場をつくる など

地面を掘っているようすを動作化した後、仕事をしている農民の思いを話し合った。主な内容は、次の通りである。（要旨）

資料4

- ・ 監督は命令だけしているようで、自分でも（地面を）掘ってしてほしい。
- ・ 聖武天皇は何を考えているのか。
- ・ なぜ農民がこんなきついことをするのか。
- ・ なぜ大仏をつくるのにここまでしなくてはいけないのか。
- ・ 農民が困るのは分かっているのに、なぜこんなことをするのか。
- ・ できあがったら、うれしい。
- ・ 大仏は大切なものだ。
- ・ 願いがかなうといい。
- ・ はやくできあがってほしい。
- ・ はやく出来上がりをみてみたい。
- ・ できたらすごい。
- ・ 一生懸命にしてつくとあとで気持ちいい。
- ・ 本当に平和になるとうれしいが逆だと何

のことだか分からない。

- ・ こんなことをして乱れはなくなるのか。
- ・ できても何にもならなかったらどうするのか。
- ・ 願いがだめならうらみを持つ。
- ・ 田畑を耕さないと税が出せないではないか。
- ・ また、貧富の差がはげしくなる。
- ・ やりたくない。でも、やめたらどうなるのか。
- ・ もっと賃金をほしい。
- ・ 普段でも困っているのに、こんなことをしてどうするのか。
- ・ 少しは休みたい。
- ・ 水銀で命を落としたのをどうしてくれるのか。
- ・ あとどれくらいするのか。 など

## 5. 考察

ここでは、実際の授業でみられた児童の発言や書いたものなどから、3で提案した「問い直しを促す方策」について考察する。

資料2にみられるように、第2時の話し合いで、児童は、奈良の大仏についての概要を一応つかんでいる。しかし、農民がどんな仕事をしたかについては十分にイメージされていない。「農民は何をしたのか。」を問うことで、第3時の学習活動3の活動で出し合われている内容(資料3)のように、大仏をつくるために農民がどんな仕事をしたかが、一歩具体的になってきている。発問によって学習内容を問い直し、具体的にできつつある姿をとらえる。

第3時の学習活動5、動作化の後に出し合われた農民の思い(資料4)のうち、約10個が疑問形であらわされている。そのうち「なぜ農民がこんなにきついことをするのか。」「(作業を)やめたらどうなるのか。」などは、資料1にも資料2にもこれまでに扱われなかった新しい問いであ

る。また、「聖武天皇は何を考えているのか。」「なぜ、大仏をつくるのにここまでしなくてはならないのか。」などは、第2時まで既に学習をしている内容(資料1、資料2)に対して、改めて問うものになっている。あらかず活動(ここでは動作化)によって、新たな問いや一応の学習がすすんでいた事柄に対しての改めての問いが生まれてきているととらえる。

内容的には、大仏づくりを疑問視するもの、肯定的に受け止めているものなど多様なものが話し合われた。話し合い活動を通して、自分とは違う感じ方、考え方に出会い、問い直しのきっかけが生まれているととらえる。ただ、ここでは、史実としてどうとらえていくかは難しい。話し合われた内容そのものについては、問いをもったままのオープンエンドの扱いとした。

## 6. 今後の課題

今後も、児童に問い直していく態度や力を育てていきたいと考えている。今後の課題を次の3点にまとめた。

- ・ 一単位時間や一単元の取り組みで、問い直していく態度や力を育てることはできない。継続して取り組むことで、児童自身の力で具体的にしたり吟味したりすることができるように育てていく。
- ・ 児童の実態や学習内容に適した具体的な方策を考え、授業づくりを進める。
- ・ 本単元の展開では扱わなかった学習方法や学習態度について、自らふりかえり問い直していくための方策を明らかにしていく。